

植物おぼえがき

著者	山中 二男
著者別表示	Yamanaka Tsugiwo
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	37
号	1
ページ	8-8
発行年	1989-06-25
URL	http://doi.org/10.24517/00055989



○ 植物おぼえがき (山中二男) Tsugiwo YAMANAKA: Miscellaneous Notes on Japanese Plants

日本の植物の分類、分布などで、近ごろ気付いたことのいくつかをとりあげ、話題を提供する。

1. ミヤマイワニガナ 1983年の南アルプス赤石岳への登りでは、長野県大鹿村を小渋川ぞいに行き、広河原で泊まった。このあたりの川岸の安定地には、オノエヤナギを主とした林があり、クサボタンも見られるが、不安定な礫地に生えているのは、おもに草本である。トダイアカバナや小渋川が type locality のアカシコウゾリナのほか、カワラニガナ、ホソバノヤマハハコ、ホソバムカシヨモギ、ヨツバヒヨドリなどが生じ、やはり葉の狭い植物が多いことに気付いた。ヨツバヒヨドリも、幅が2.5 cm ほどで、ハコネヒヨドリともいえるものになっている。

翌日からは悪天候のため、4日間停滞したが、荒川岳(前岳)からの土石流に近いすさまじい濁流は、川原の植物をこのあとどう変えるのかと考えた。あくる年、荒川岳からの下りにここを通ってみると、一目で植物が貧弱になっていることがわかった。前年あったイワウサギシダはなく、多かったトダイアカバナもほとんど見なかったが、ミヤマイワニガナが新たに生えていた。機会があれば、また訪れてみたいと思っている。

ところで、ミヤマイワニガナは、イワニガナとおなじとする見解がある。そこで調べてみると、これにはイワニガナと別の種とみなすほか、その亜種、変種または品種とするすべての名がついている珍しい例であることがわかった。古いものから順にあげておく。

Ixeris capillaris NAKAI, Rep. Veg. Kamikochi 41 (1928)

I. stolonifera A. GRAY subsp. *capillaris* (NAKAI) KITAMURA in Bot. Mag. Tokyo 49: 287 (1935)

I. stolonifera form. *capillaris* (NAKAI) OHWI, Fl. Jap. 1246 (1953); in Bull. Nat. Sci. Mus. No. 33: 90 (1953)

I. stolonifera var. *capillaris* (NAKAI) T. SHIMIZU, New Alp. Fl. Jap. Col. 1: 11, 311 (1982)

2. シロバナアサマリドウ 四国の山地では、アサマリンドウは普通の植物で、この花は秋の山歩きを楽しませてくれるものの一つである。まれに白花も見られ、シロバナアサマリンドウの名がある。ただ、和名だけでなくまったくおなじ学名が、別べつに下記のようにつけられている。なお、このほかに赤沢時之氏は、高知女子大学紀要で、多くの新名を発表していることを付け加えておく。

Gentiana sikokiana MAXIM. form. *albiflora* AKASAWA et E. HIROSE in Bull. Kochi Wom. Univ., Nat. Sci. 25: 5 (1977)

G. sikokiana form. *albiflora* TOYOKUNI in Journ. Jap. Bot. 58: 315 (1983)

○ A. MIYAWAKI et al. (ed.) Vegetation Ecology and Creation of New Environments 東海大学出版会 1987 ¥18,000 B 5判, 473 ページ

1984年8月、「植生生態学と新しい環境形成」をテーマに国際植生学会のエクスカージョンが、北は秋田県から南は和歌山県まで本州を縦断して16日間にわたっておこなわれ、エクスカージョン後は、東京で3日間のシンポジウムが開かれた。私も大会委員の一人として長野県縞枯山および霧ヶ峰においてエクスカージョンに参加し、若干の役割を果たした。本書は、この折のシンポジウムに提出された論文40篇(英文27篇、独文13篇)を第一部、エクスカージョンの記録を第二部として編集したもので、1988年6月に完成した(ただし、出版年は1987年となっている)。なお、第一部のはじめの部分は、沼田真大会委員長の開会のことば、常陸宮殿下のおことば、長洲神奈川県知事の論評など11篇の記事に当てられている。

この学会には、海外からはヨーロッパ13ヶ国、カナダ、アメリカ合衆国、ブラジル、タイ、中国、韓国から総勢71名の参加者があり、収められた論文中30篇がこれら海外の参加者によるものとなっている。論文は、バーゼル大学のZoller教授による「人と自然の関係史」やローマ大学のPignatti教授の「地中海域における自然植生と人間との関連」をはじめ、単なる植生論を超えていずれも植生と人の関係といった視点から書かれているのが特徴である。新しい環境形成への世界中の植生学者の意気込みあふれる論文集ということが出来る。

第二部は、前国際植生学会長夫人Charlotte Ellenberg博士の手になるもので、編者の言を借りれば、エクスカージョンの内容を「ドキュメンタリー科学日記風に」まとめている。その中に、本州の内陸部の潜在自然植生はブナ群団とされているようだが、ヨーロッパアルプスと比べて考えてみると、それは疑問であるという指摘や縞枯れは風の影響だけではなく樹令そのものとの関係を考えるべきだというくだりなど、短期間の中での彼女の慧眼に感心させられる。

いま一つユニークなのは、論文ごとに著者の顔写真が掲載されていることである。現代の植生学の果たすべき役割を真剣なまなざしで著者が語りかける——そんな論文集にみごとにまとめ上げた編者の努力を多としたい。(清水 建美)